

## 日本語教師の素顔

全国で活躍する教師は2万9,190人といわれる。教師の数だけ、物語がある。今月は、難民の学習支援として、日本語を教える女性に出会った。

### 矢崎理恵さん(51歳)

国際基督教大学日本語主専攻卒業。  
卒業した1982年に青年海外協力隊でフィリピンに赴任。  
帰国後は、就学生・留学生などに教える。現在は、東京都品川区にある  
社会福祉法人さぼうと21で学習支援室コーディネーターを務める。  
さぼうと21: <http://www.support21.or.jp/>



「1 回限りの人生なので、彩りのある生活を提供できたら」と話す矢崎理恵さん。日本語教師歴約30年。現在所属する「さぼうと21」では、主に、ミャンマーから難民として定住した人たちへの、学習支援コーディネーターの役割を担っている。

高校生の頃から、自分の境遇と世界のさまざまな現実とを比較し、「役に立ちたい」という思いがあった。大学在学中に青年海外協力隊の試験を受け、卒業と同時にフィリピンに赴任。また、日本語教育能力検定試験がなかった1982年のことだ。試考錯誤しながらも有意義で充実した2年間は、日本語教師を一生の仕事にする決心をさせてくれた。職務経歴書には、非常勤講師として就学生や留学生を教えた経験の他、教務主任として日本語学校の立ち上げに関わったこと、教材執筆の経験などが、ズラリと並ぶ。

「仕掛けを考えるのが好き」と笑う矢崎さんは、現在、学習者とボランティアが、一緒に合唱する機会をつくっている。教える、習うという関係ではなく、歌いたい人が集まって歌う。キーワードは「優しさの交差点」。日本で生きていくしかない立場の人に寄り添う気持ちが伝わってくる。

夫の転勤に伴って働く場所を変え、最近では、家の事情で1年余り仕事を離れる時期もあった。「仕事を辞めたら、ぬけがらが服を着ているような感じでした」。年齢を重ね、自分の存在理由を問う時、日本語教師の仕事が好きで自分にあらためて気付く。

## Q u e s t i o n s

### ▼家庭と仕事の両立は？

理解ある家族のおかげでやっつけています(笑)。元新聞記者の夫と一人娘には、「他の人のためには120パーセントやるよね」と言われます。お互いそれぞれが、好きなことをやっています。

### ▼どんな性格ですか？

基本姿勢は「オープン&シェア」。例えば、自分が作り上げた教材がいいと思ったら、公開して使ってもらいたい。お互いにもっといい授業ができればいいと思うので。

### ▼宝物は何ですか？

人とのつながり。昨年、28年ぶりに訪れたフィリピンでのことですが、元同僚が案内してくれた学校に行ったら、校長先生がフィリピン時代の元同僚。さらに、日本で教えた留学生が教師をしていました！

### ▼得意なことは？

寝なくても大丈夫なこと。平均睡眠時間4時間で、どこでも寝られます。この特技(?)で忙しい日々を乗り切っています。